



ししん



川路 新吉

ししん

郵便受けをのぞくと、古い友人から手紙が届いていた。

電子メール全盛の時代にわざわざ手書きの手紙をよこすなんて変わった奴だ。

こいつに最後に会ったのはいつだっただろう。思い返すと、高校を卒業して大学生になって初めての同窓会、それが最後だったような気がする。

そのときのこいつの、鈍くさく俺が気をきかして話しかけるまで場になじめずまごまごしていた様子を思い出す。

高校で初めて出会ったときからずっと、こいつは一言で言えばいきるのが下手な感じの奴だったのに。

郵便受けに手紙と一緒に入っていた夕刊に目を落とすと、手紙の差出人と同じ名前が一面に踊っていた。

あの鈍くさい奴が今や時代の寵児になるなんてな。人生とは不思議なものだ。

手紙は二枚あった。とりあえず最初から読み始める。

久しぶり。

長いこと会っていませんがお元気にはしていますか。

読み始めて、こいつの書く字を初めて見たことに気づいた。

意外と綺麗な字を書くんだな。見た目とは裏腹だ。記憶のなかの奴のやぼったい格好を思い出して少し笑った。

ぼくのことは覚えているかい？

高校時代にはあまり印象強いほうじゃなかったから、君はひよっとしたら忘れていたかもしれない。

ただ、最近はずも世間を騒がしてしまっているから、きっと頭のいい君のことだからぼくのことを思い出してくれていることと思う。

確かについ最近までこいつのことは忘れていた。

特に親しいわけでもなかったし、自分で言うとおりに目立つわけでもなかったから。

初めてテレビでこいつの顔を見たときは本当に驚いた。警察にでも捕まったのならまだしも、そうじゃなかったからなおさらだ。

こいつがまさか日本を代表する経営者になるなんて。

さて、前置きはこれくらいにしよう。

ぼくは今、会社を経営している。

まだ日は浅いけれども経営状態は良好で日本を代表する企業として全世界に認知されるまでになった。それに結婚もし、子宝にも恵まれた。

文字通り何不自由ない生活。いや、それ以上だ。

高校時代のぼくを知っている君からしてみれば、きっと不思議に思うだろうね。

なぜそんなことができたのか、と。

それは一本のペンの力なんだ。

ペン？

いったい、こいつは何の話をしようとしているのだろうか。

それを手に入れたのは旅先でのこと、ある訪れた古びた骨董店に立ち寄ったときだ。

とても胡散臭い感じの店で、普段のぼくなら絶対に立ち寄らない感じの店だった。

だけどそのときは、なぜか立ち寄ってしまったんだ。今思えば運命だったのかもしれない。

そう。運命。

ぼくがそこで手に入れたペンは、運命を引き寄せるペンとでもいう代物だった。

きっと信じてもらえないかもしれないけど、このペンで書いたことは現実になるんだ。

ぼくはまず「金持ちになりたい」と書いてみた。そしたらどうだろう。結果は君も知っての通り。

「運命の女性に会いたい」と書いた次の日には今の妻に出会った。

「人々から尊敬されたい」と書いたらまもなくいろいろな賞を表彰されるようになった。

信じられないだろう？

でも本当なんだ。

背筋になにか寒いものを感じた。

狂っている。

前から変な奴だとは感じていたが、とうとう頭がおかしくなってしまったのだろうか。

たかがペンで書くだけでそんなうまいことが起こるはずがない。ばかっている。

しかし、なぜこいつは俺にこんな手紙を送ってきたのだろうか。

さて、いよいよ本題に入ろう。

高校時代、実に君はぼくによくしてくれた。

よくぼくをバカにしてクラス中を笑わせていたね。

それにお金もよく借りにきた。今になってもまったく返してくれていないけれども。

大学に入って初めての同窓会の時もそうだ。後から聞いた話だと、彼女に振られたばかりだったらしいね。だからといってその鬱憤を他人にぶつけていいと言うものじゃない。

手紙はそこで一枚目が終わっていた。

二枚目を見るとそこにはこう書かれていた。

ここまで読んでくれてありがとう。

さて、君にお願いがあるんだ。

この世からいなくなってほしい。

だけど、なぜ自分が死んでしまうのか、ちゃんと理解してほしいからこの手紙を読むまでは生きていてほしい。

それが今のぼくの願いだ。

そこまで読んだとき、頭の中で何かのはじけたような音がした。

その後、自分の体が地面にたおれこむ大げさな音だけが聞こえた。

ししん

<http://p.booklog.jp/book/40864>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40864>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40864>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.